

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：23702

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24660049

研究課題名(和文) ブラジル人児童の健康課題に関する実態：児童と保護者の生活様式に焦点化して

研究課題名(英文) Situation of health issue of the Brazilian students Focus on lifestyle of Brazilian students and their guardians

研究代表者

鈴木 里美 (SUZUKI, SATOMI)

岐阜県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：00448698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：在日ブラジル人は、滞在が長期化していく中で、公立小学校に通う児童が増加している。本研究は、ブラジル人の生活様式から児童の健康に影響する背景要因を捉え実態を明らかにするために、児童と保護者を対象に食生活を中心とした面接調査を実施した。児童の朝食時の孤食は保護者の早朝出勤や夜勤が影響し、保護者の就労による遅い帰宅時間が朝食の欠食につながっていると推測され、夕食の時間に児童が保護者と過ごすことはコミュニケーションをはかる大切な時間として活用されていると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The number of Brazilian students in an elementary school has increased lately. The purpose of this study is to clarify their actual situation by grasping the background which influences the health of the Brazilian students. Data are collected through interviews on dietary habits of the children and their guardians. Solitary eating of the Brazilian students at breakfast is due to their guardians' early working or guardians' night shift working. Malnourishment of the children may also be the result of their guardians' belated time of coming home. We estimate as a result that the dinner time with their guardians is an essential opportunity for the Brazilian students to communicate with them.

研究分野：看護学

キーワード：ブラジル人児童 健康

1. 研究開始当初の背景

1990年に出入国管理及び難民認定法の改正を契機にニューカマーが急増し、2012年の外国人登録者は、約203万人(総人口の1.6%)となった。ニューカマーを対象に実施した外国人検診では、生活習慣より高血圧や糖尿病などの生活習慣病に罹患する要因が認められ、母国での地位と比較した場合の外国人労働者としての社会的地位の低下や異文化ストレスが精神障害を引き起こすことが指摘されている。このような背景の中、その子どもの健康に与える影響も大きいと予測され、児童期からの生活習慣病の予防とそのため取り組みが必要であると考えられた。

筆者らはニューカマーの子どもの中でA県において多数を占めるブラジル人児童を対象にB小学校において健康課題を明らかにするために生活実態調査を実施した。調査結果から身体・精神面での症状がみられたが、生活様式との関連は明らかになっていない。そこで、児童の健康に影響する背景要因を見出していくことが必要と考えた。

2. 研究の目的

ブラジル人児童がどのような心身の健康課題をもっているのか、児童と保護者の生活様式を把握し児童の健康に影響する背景要因を捉えることで実態を明確にする。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

調査対象の児童は、1年生および2年生は日本語を理解することに困難が大きいため日本語の理解度を考慮して3年生から6年生までの児童を対象に実施した。

2013年度の調査

C市の公立小学校1校において、3年生から6年生までの児童35名とその保護者35名を対象に実施した。

2014年度の調査

C市の公立小学校3校において、3年生か

ら6年生までの児童39名とその保護者38名を対象に実施した。

(2) 調査時期

健康診断結果、保健室来室記録、健康観察記録は、児童の健康状態と課題を検討することで面接調査実施時の資料とするため、2013年11月から2014年1月および2014年7月から2015年1月に開示してもらい、メモに書き留めた。

児童の面接調査は、2013年12月から2014年2月および2014年6月から2014年9月に個別に面接調査を実施した。

保護者の面接調査は、2013年12月から2014年2月および2014年7月から2014年9月に個別に面接調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 児童と保護者の基本属性

調査対象児童の基本属性

児童は、「3年生」が男子3名、女子1名、「4年生」が男子1名、女子3名、「5年生」が男子1名、女子1名、「6年生」が男子4名、女子1名で、男子9名、女子6名の合計15名であった。調査対象児童のうち2名はきょうだいである。

調査対象保護者の基本属性

保護者の調査対象者数は、母親13名、父親1名で、保護者の年齢は、「30歳代」が8名、「40歳代」が5名、「50歳代」が1名で、職業は「非正規の工員」が12名であった。

家庭での使用言語は、「すべてポルトガル語」が8名、「ほとんどポルトガル語」が5名、「全て日本語」が1名であった。日本語の会話力は、「流暢に話せる」が2名、「日常会話が話せる」が5名、「簡単な日常会話が話せる」が6名、「ほとんど話せない」が1名、日本語の読解力は、「新聞が読める」が1名、「漫画や絵本が読める」が6名、「商品名が読める」が4名、「ほとんど読めない」が1名、「まったく読めない」が2名であった。

(2) 児童の健康調査

児童の健康診断結果

15名の児童の中で、中等度肥満は3名であったが、その中の1名は、学年が上がり中等度肥満から軽度肥満、標準体重へと変化していた。視力は、裸眼視力が現在までで一番悪い結果をみると、0.7~0.9が2名、0.3~0.6が7名、0.2以下が1名であった。

歯の状態は、3名が歯列・咬合の定期的観察が必要であった。歯垢の状態は、若干の付着がある児童は6名、相当の付着がある児童は7名で、歯肉の状態は、10名が定期的観察が必要で、2名が専門医による診断が必要な状態であった。過去の健康診断時に乳歯が未処置だった児童は5名、永久歯が未処置だった児童は2名であった。

児童の保健室来室記録

児童は、調査時まで15名全員がけがや病気で保健室を来室していた。年間で来室回数の最も多い児童は、けがが13回で1名、次いで病気が11回で1名であった。

児童の健康観察記録

児童は、調査時まで15名全員が欠席していた。年間で欠席日数の最も多い児童は36日の1名で、他に年間の欠席日数が20日を超えている児童は3名であった。欠席理由は、インフルエンザ、水痘、流行性角結膜炎などの感染症罹患によるもの、喘息などの持病によるもの、風邪、熱、頭痛が目立った。家の用事で休む児童も見受けられた。健康観察記録は、児童が自身の体調をふりかえって記入するもので、風邪、熱、咳、鼻水、頭痛、腹痛など多くの記述があった。

(3) 児童と保護者の食生活

本研究では、健康を維持するために食生活が重要であり、日本とブラジルの文化的な差異が食生活において現れると考えられ、食生活を中心に生活実態調査を実施した。

児童の朝食摂取の頻度は、「毎日食べる」が10名、「毎日食べない」が5名でその理由

には、「食べる時間がない」「食べたくない」「母親が早朝出勤で朝食が用意されていない」「遅刻するので食べない」「めんどくさい」が挙げられていた。面接調査日の朝食摂取は、「有り」が13名、「無し(欠食)」が2名で、4名が「ひとり(孤食)」で朝食を摂取し、その中の2名が飲み物のみであった。朝食が孤食であった児童4名の保護者の朝食時の状況は、「父母ともに出勤」が2名、「母親夜勤、父親出勤準備」が1名、「母親家事、父親出勤」が1名で、欠食であった児童2名の保護者の朝食時の状況は、「母親出勤」が1名、「父母ともに早朝出勤・夜勤なし」が1名であった。朝食で主食にパンを摂取している7名の児童は、主菜と副菜の摂取がなく、主食にご飯を摂取している3名の児童は、副菜の摂取がなかった。

児童の給食摂取の頻度は、「毎日食べる」が15名全員で、給食の野菜は14名が摂取していた。給食が好きな12名の理由には、「おいしい」「家庭とは違う献立や味付けが食べられる」「日本食に慣れてきた」「みんなと一緒に食べられる」「元気が出る」「健康によい」「お腹が空いて食べる」「わからない」が挙げられていた。

児童の夕食摂取の頻度は、「毎日食べる」が15名全員で、夕食の共食状況は、「家族全員」が7名、「家族と一緒に」が5名、「ひとり(孤食)」が2名、「子どもだけ」が1名であった。夕食時間は、「20時30分から21時30分未満」が7名であった。夕食で主食にパンとコーンフレークを摂取している3名の児童は、主菜と副菜の摂取がなく、主食にご飯を摂取している12名の児童は主菜を摂取していたが、8名の児童は副菜の摂取がなかった。夕食が好きな15名の理由には、「おいしい」「好きなものが食べられる」「家族と一緒に食べられる」「母が作ってくれる」「手作りである」「お腹が空いて食べる」が挙げられていた。

児童の家庭での生活時間について、欠食であった児童2名と孤食で飲み物のみの摂取であった児童2名を対象に保護者の帰宅時間、夕食時間、就寝時間、起床時間をみると、保護者の帰宅時間は、「19時30分から20時30分未満」「20時30分から21時30分未満」が各2名、夕食時間は、「20時30分から21時未満」「21時から21時30分未満」が各2名、就寝時間は、「21時30分から22時未満」「22時から22時30分未満」が各2名であった。起床時間は、「6時30分から7時未満」が1名、「7時から7時30分未満」が3名であった。

児童の好きな食べ物は、「肉類（焼肉、肉炒め、ハンバーグなど）」が8名、「油っこい物（ラーメン、唐揚げなど）」が6名、「カレーライス」「ご飯」が各5名、「めん類（焼きそば、冷やし中華など）」「フェジョン」が各4名であった。嫌いな食べ物は、「野菜類（ピーマン、なす、サラダなど）」が8名、「魚類（うなぎ、穴子など）」が6名、「パン（食パンなど）」「ブラジルの食べ物（フェジョアーダ など）」が各2名であった。

ジュース摂取の頻度は、「毎日」が11名で、よく飲むジュースは、「果実ジュース」が8名、「コーラ」が6名、「コーラを除く炭酸飲料」が3名であった。

好きな日本食は、「カレーライス」が6名、「めん類（焼きそば、冷やし中華など）」が5名、「ご飯」「味噌汁」「寿司」が各3名、「唐揚げ」「納豆」が各2名であった。家庭では14名が野菜を摂取し、摂取している野菜は、「キャベツ」が8名、「きゅうり」「トマト」が各7名、「人参」が6名、「レタス」が5名であった。

保護者が作る日本の料理は、「味噌汁」が7名、「カレーライス」「焼きそば」が各4名、「豆腐」「納豆」「すき焼き」が各3名、「ご飯」「豚汁」「煮しめ」「牛丼」「鍋」「刺身」「とんかつ」が各2名であった。保護者は日本の

料理を作ることに對して、「日本料理作りの難しさ」を挙げながら、「日本料理の購入」をし、「日本料理を習い作ること」を実践していた。

保護者が作るブラジルの料理は、「フェジョン」が13名、「肉類（牛肉、豚肉、鶏肉）」が7名で、フェジョンと一緒に食べる「白いご飯」を6名が挙げていた。

保護者が食事で気をつけていることは、「野菜を食べるように働きかける」「野菜を摂取し栄養バランスを考える」「油っこい物を食べさせない」「炭酸飲料を控える」「甘い物を食べさせない」「児童が好きな物を作る」「夜は強い食べ物を食べさせない」「嫌いな物を食べよう工夫している」「ブラジルの弁当を食べる」「外出時にご飯を食べる」「和食を習っている」「給食のメニューを作る」「弁当をきれいに作る」が挙げられていた。また、保護者が児童の食生活で心配なこととして、「食べる量が多いこと」「哺乳瓶で飲んでいること」「食べないこと」「病気のため食生活を改善すること」が挙げられていた。

(4) 考察

保護者の就労と児童の食生活

日本スポーツ振興センターの調査では、朝食を毎日食べる児童は約90%で6時30分以前に起床し、朝食の欠食理由に食べる時間がない、食欲がない、朝食が用意されていないことが報告されている。この結果と比較すると本調査では、対象者数が少ないため一般化できないが、毎日食べない児童が15名中5名であり多かった。また、夕食時間が20時30分を過ぎている児童が15名中7名で、その内4名は21時を過ぎていた。日本スポーツ振興センターの調査では、小学生の夕食の開始時間は、20時31分から21時が0.7%、21時01分からは0.4%であり、本調査では、対象者数が少ないことに留意が必要であるが、夕食時間が遅い傾向にある。

また、本調査では、朝食が孤食であった児

童の保護者の朝食時の状況は、早朝出勤、夜勤、出勤準備であったことから、松本ら(2011)の調査結果と同様、保護者の就労が朝食の孤食化傾向の要因となっていることが推測される。

本調査の結果から、朝食を欠食した児童および飲み物のみ摂取し孤食であった児童4名の家庭での生活時間をみると、保護者の残業にともない帰宅時間が遅くなることで、児童と保護者の夕食時間が遅くなり、児童の就寝時間が遅くなっていった。そして、児童の就寝時間の遅れは、起床時間を遅らせ、その結果、朝食をとる時間がないことが欠食につながっていた。以上から、保護者の就労による遅い帰宅時間が結果的に児童が朝食を欠食することにつながっていると推測される。

夕食の摂取状況では、15名の児童全員が毎日夕食を摂取し、15名中12名が家族と一緒に、家族全員での共食であったこと、児童15名全員の夕食が好きな理由に家族と一緒に食べられる、母が作ってくれる、手作りであるなど、夕食を家族とともにある時間、保護者のぬくもりを感じられる時間として大切にしている様子がうかがえる。夕食の時間に保護者と過ごすことは、親子間のコミュニケーションをはかる大切な時間として活用されているのではないかと考えられる。

栄養バランスを考えた食事摂取

児童の好きな食べ物は肉類や油っこい物であり、好きな日本食として、カレーライス、焼きそば、ご飯、味噌汁、寿司などの日本食が挙げられていた。好きなブラジル料理は、肉類とフェジヨンのみであった。

日本スポーツ振興センターの調査では、学校給食で好きな料理は、カレーライス、パン、めん、デザート の順であり、本調査の児童の好きな日本食の中にもカレーライスやめんが含まれ、日本人と嗜好が似ていた。児童は給食を食べて、野菜を食べられる児童が14名と多い。西田(2011)は、ブラジル人児童に

給食の好き嫌いがあることを報告しているが、本調査では給食が好きな児童が15名中12名で、おいしい、家庭とは違う献立や味付けが食べられる、日本食に慣れてきたと捉え、肯定的であった。

保護者は栄養バランスを考え、児童が好きな日本食の焼きそばに野菜を入れるなど、野菜摂取に気をつけていた。保護者によっては、給食のメニューを調べて作っている者も見受けられた。

児童の朝食は、主食がパンの場合、主菜と副菜の摂取がなく、ご飯の場合、副菜の摂取がなかった。夕食は朝食に比して主菜、副菜が加わっていたが、主食と飲み物みの児童が3名いた。これらのことから、主食、主菜、副菜をバランスよく摂り入れた食事作りのために学校給食からの発信をしていくことが可能なのではないだろうかと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計2件)

鈴木里美, 松本訓枝, 世一和子, 在日ブラジル人の健康課題, 第28回日本国際保健医療学会学術大会, 2013.11.2, 沖縄

鈴木里美, 松本訓枝, 日比薫, ブラジル人児童の健康課題, 第55回日本熱帯医学会大会, 第29回日本国際保健医療学会学術大会, 2014.11.2, 東京

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 里美 (SUZUKI SATOMI)
岐阜県立看護大学・看護学部・助教
研究者番号: 00448698

(2) 研究分担者

松本 訓枝 (MATSUMOTO KUNIE)
岐阜県立看護大学・看護学部・講師
研究者番号: 90448697

日比 薫 (HIBI KAORI)
岐阜県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号: 70742998

世一 和子 (YOICHI KAZUKO)
岐阜県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：90625964
(平成 26 年 3 月まで)

(3)連携研究者
なし